

幼稚園における子どもによる合奏づくりに関する一考察

尾辻菜摘子 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

日吉 武 [鹿児島大学教育学系 (音楽教育)]

A study of creating ensembles among kindergarten children

OTSUJI Natsuko and HIYOSHI Takeshi

キーワード：合奏、楽器、自由遊び、環境構成、子どもの主体性

はじめに

新訂標準音楽辞典アーテ第二版によると、合奏とは2つ以上の楽器による演奏形態とあり¹⁾、横井(2010)は保育現場においては、ほとんどの園で行事に器楽合奏が行われていると述べている(横井 2010)。そのことから合奏は保育現場にとって重要な活動のひとつであるといえよう。

筆者の一人、尾辻がかつて勤務していた幼稚園においても、誕生会での出し物や生活発表会など、合奏を園児や保護者の前で披露する機会が年に1回は必ずあった。

ここで我々が課題として考えるのが、合奏の行事本番に向けて、どのように合奏を完成させていくかということだ。楽器を手にした子ども達が整列し、楽譜の提示などをしながら教師が一斉指導を行う光景を思い浮かべる人も多いのではないだろうか。行事で発表することを目的とした合奏指導においては、あらかじめ決められた合奏譜を用いて、一斉活動で行う場面を多く見たことがある。

幼児教育は遊びを通した学び・環境を通した学びを基本とするものである。しかし遊びを通した学びを基本とする幼児教育の在り方を考えると、そのような一斉活動での合奏指導はふさわしい指導なのだろうか。また、環境を通して行う学びについては、幼稚園教育要領解説で以下のように触れられている(下線は尾辻が加筆)。

(1) 環境を通して行う教育の意義

一般に、幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが培われる時期であることが知られている。

幼稚園では、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児期にふさわしい生活を通して育むことが大切である。(後略)

(2) 幼児の主体性と教師の意図

このような環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合っており立つものである。

(中略)

つまり、教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開である。
(後略)

これらを踏まえると、上述したような一斉活動のみの指導は幼児期の教育に適していないと言わざるを得ないのではないだろうか。

本研究ではこのような問題意識のもとに、合奏を幼児の生活の中に身近に置き、子どもの主体性を発揮させながら子どもと共に合奏をつくりあげる方法について、実践を通して考察する。

1. 保育現場における合奏の取り組みの実際と問題点

ベネッセの調査(2019)によると幼稚園、保育所、認定こども園において通常保育時間に鼓笛隊などの音楽活動のある園は、平均して公立園で19.5%、私立園で56.7%である(ベネッセ教育総合研究所 2019)。公立園においては、年間を通じて通常保育時間に音楽活動を行うというカリキュラムをとっていないため調査では数に入っていないものの、合奏の行事の前だけ通常保育時間中に時間を設けて音楽活動や一斉指導を行っている園もあるのではないかと推測される。

また鹿兒島市内にある就学前教育施設76施設のうち、ホームページで音楽会・発表会等子ども達が合奏を行う行事を確認できたのは30施設で39%だった。発表会の内容を明記していない施設や、全保護者の参観がない取り組みも合わせると、半数以上の施設で合奏に取り組んでいることが推測できる。

では、合奏の取り組みの内容はどのようなものなのだろうか。尾辻のこれまでの実践では、年間を通じて自由にタンブリン、鈴などの簡単な楽器に触れられるような環境設定をしていた。子どもが廃材でつくったマラカスなどの手作り楽器がそこに加わることもあった。手に取って音を楽しんだり、音楽に合わせて鳴らしてみたり、ダンスをする際に手に持ったり、またかけっこをしている友達を応援するのに園庭で使ったりと、子どもらしく自由な感性で遊ぶことを重視していた。

しかし合奏の行事が近づくと、自由遊びとは別に学年活動などの時間を設け、一斉活動による指導が多くなった。そこでは発表に向けてそれぞれがリズム打ちを覚えるなど、より完成度を高めて発表するという雰囲気が強くなっていた。特に、あらかじめ決められた曲と決められたリズム打ちを行うことや、教師から「教えられる」形で習得していくことが挙げられるが、それが子どもの主体性を発揮させていることになっていたのか、いささか疑問がある。

では、合奏の行事当日に向かって活動していく中で、より望ましい指導方法はどのようなものなのだろうか。まず、幼稚園教育要領の記述から考察する。

2. 幼稚園教育要領における合奏の取り扱いについて

「はじめに」で述べたように、幼児教育では教師主導で教えるのではなく、子どもが主体となり体験を通して様々な能力を身に付けていけるような指導の在り方が求められる。

では、そのような方向性の中で、楽器を使うことや合奏について幼稚園教育要領ではどのように

示されているのだろうか。幼稚園教育要領の中で楽器や合奏づくりにおいて特に重要だと思われる箇所について、以下に記載する（下線は尾辻が加筆）。

幼稚園教育要領 第2章 表現

2 内容（6）音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

3 内容の取扱い（3）生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。

上記引用部分の趣旨を踏まえれば、合奏の完成度を高めることは本来の目的ではない。重視すべきことは子ども自らが主体的に表現を試み、その中で感性を働かせながら表現を工夫していく「過程」を大切にすることや、自己表現に満足を得られることだろう。合奏の完成度など、教師や保護者といった大人が求めたいことに重きが置かれるが故に、子どもの自己表現の機会が少ない活動は、教育要領で求められる内容に沿わないといえよう。

幼稚園教育要領には、そもそも「合奏」という文言はない。しかし現実には多くの園で合奏の発表が行われているのが実情である。そこで、幼児が自ら表現を楽しみながら合奏づくりに取り組み、発表のその時まで子どもの主体性が発揮されながら行事の本番を迎えられることを目指し、実践を試行した。

3. 保育実践の概要と実践記録

本項では、尾辻が子どもと共に合奏づくりを試みた実践について記す。本実践では子どもがリズム打ちをつくり、合奏へと完成させて行く過程に注目する。

（1）実践の概要

① 実践期間

令和1年11月25日～12月19日 主に自由遊びの時間に行う²⁾。

② 対象

鹿児島大学教育学部附属幼稚園 年長児うみ組（男児15名、女児16名、計31名）

③ 活動目標

「お菓子パーティーで、合奏を披露しよう。」

④ 合奏曲と使用楽器

楽曲 《おもちゃのチャチャチャ》

楽器 カスタネット、鈴、タンブリン、トライアングル、シンバル（教師による手づくり楽器）

当日までの実践の中で最も重要なのは、教師が主導して合奏を仕上げていくのではなく、子どもが主体性を発揮して合奏づくりをするということである。より子どもの生活に即したものにするため、楽曲や使用楽器も子どもの意見を聞いて話し合っただけで決定する方法もあるが、限られた保育時間の中で合奏をつくる活動や、繰り返し遊ぶ中でリズム打ちを覚えていくことに時間をかけられるよう、今回の実践では楽曲と使用楽器はこちらで提示することとした。使用楽器については、子ども達がこれまでに慣れ親しんでおり、運動会の演目でも使用した打楽器の中から選んだ。

⑤保育室内環境構成 (11月26日～)

ボードと磁石の教材は保育室の壁面に設置し、その近くに楽器とカセット、デッキも置いた。子どもがいつでも見て遊べ、楽器遊びと合奏づくりができるようにした。

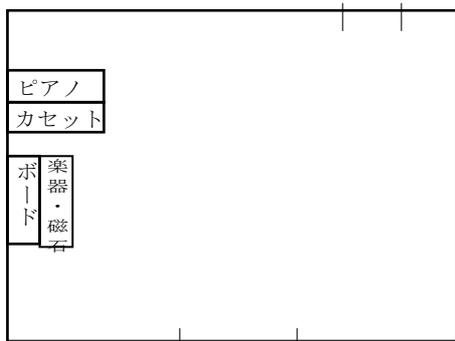


図1 保育室内配置

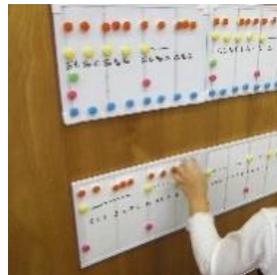


写真1 ボード



写真2 磁石

ボードには2拍ごとに縦の線を表示、磁石は楽器ごとに色分けを行い、子どもが見て分かりやすいように配慮した。また、ボードに磁石を貼っておくのは、時間が経っても見て同じリズムを再現できること、および試したり工夫したりしながら合奏づくりを進めていくのにいつでも手軽に変更できることから、この方法を採用した。

(2) 実践記録

①合奏の内容とメンバー

初めに提案した際、合奏を披露したいという子どもは17人だった。楽器を決めている間に希望が増え、11月25日の話し合いでは22人の子どもが合奏披露のメンバーとなった。また次の日から少しずつ希望者が増え、最終的には25人で合奏に取り組むことになった。25人の内訳は、カスタネット8名、鈴4名、タンブリン5名、トライアングル5名、シンバル3名であった(当日、鈴3名、タンブリン3名、シンバル1名は欠席)。

②実践の流れと内容

当日まで全員での合奏練習は最小限に留め、自由遊びの中でどれだけ合奏が形になるかを試した。この中で、尾辻が保育時間中に訪問した際には一緒に楽器遊びをし、子どもが鳴らしたリズムを、ボードに磁石を貼って再現する手助けをした。楽器を鳴らして遊ぶ中で、子どもが元のリズムと違うリズムで鳴らした際には、一旦音楽を止めて該当箇所を繰り返し、元のリズムと今鳴らしたリズムどちらにするかをその都度子どもと相談してリズムを整えていった。

また本番の1週間前にはリズム打ちを決定とし、残りの期間は本番に向けてリズムを覚えていく

ような遊び方へとシフトするように促した。

表1 実践の流れと内容

「お菓子パーティーで、合奏を披露しよう」		
期	日付	内容・事例
I	11月25日(月) 11:00~11:20	12月19日(木)のお菓子パーティーにて、下級生に合奏を披露することを提案し、参加者と担当楽器を決める【一斉活動】
	11月25日(月)	A児のリズムづくり
	11月27日(水)	B児とC児のリズムづくり
II	12月5日(木) 9:20~9:30	これまでに合奏づくりと楽器遊びをした子どもが他の子どもの前で発表する、一部の子どもによる合奏試演【一斉活動】
	12月9日(月)	F児によるリズムの変更に気が付くA児
III	12月10日(火) 9:30~9:40	発表メンバー全員による試演【一斉活動】
	12月10日(火)	H児とI児、J児によるリズムづくり
IV	12月16日(月) 9:30~9:45	メンバー全員で、聴きあう活動を行う【一斉活動】
V	12月19日(木)	お菓子パーティー当日

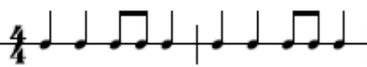
自由遊びの時間でそれぞれがやりたい時に合奏づくり・楽器遊びを行う。

4. 子どもの実態

I 期

今回の実践は有志のメンバーで行うが、行事に向かって取り組むという事項が重要な要素であったため、まず11月25日の学級活動時に、「お菓子パーティー時、下級生に向けて合奏を披露する」という共通認識をした。約1か月後の合奏披露に向けて、まずは普段からよく楽器で遊んだり、カセットをかけてダンスをして遊んだりしていたA児が積極的に合奏づくりを始めた。

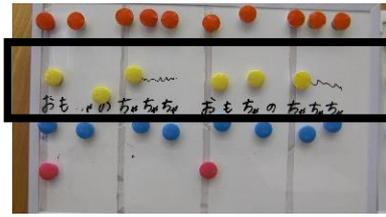
○A児のリズムづくり

A児は、合奏の発表をすると決めた11月25日、弁当を食べ終わると早速棚から楽器を持ち出して楽器遊びを始めた。まず初めに自分の担当楽器であるカスタネットを手に取り、カセットの音楽に合わせてごく自然にたたき始めた()。冒頭2小節を叩くと一度カセットを止めて巻き戻し、再び音楽に合わせて同じリズムを叩いて確認し、そのリズムに満足した様子だった。もう一度、次はカセットを止めて歌を小さく口ずさみ、頭の中でリズムを反芻している様子で、磁石を貼る作業を行っていた。A児は同じリズムを繰り返して4小節間のリズムづくりとボード表記をした。その後すぐに「次は鈴！」と言い、鈴を手にとった。「こういうのは？」と、鈴を鳴らし始め()。黄色の磁石をボードに貼り、尾辻に「ボードのペンは何？ シャラララ~のところ、線をかくんでしょう？」と問いかけた。二分音符で鈴を鳴らし続けるのを表すために、ペンで波線を加えて、先ほどのカスタネットの時と同様に同じリズムを繰り返した4小節間のボードを整えた(写真3)。

その後も自分の担当楽器に限らず色々な楽器を順番に手にとり、ピアノ伴奏のカセットに合わせて感性の赴くままに楽器を鳴らし、一旦カセットを止めて自分がたった今鳴らしたリズムを思い出すように再現し、ボードに磁石を貼って記録する作業を繰り返していた。何も無い状態から、音楽を聴いて感じたままに音を鳴らしてみる行動は、子どもが何に邪魔をされることもなく自由に感性

を働かせているといえるのではなからうか。こうしてこの日できあがったリズムを示す（譜例1）。

4小節間、4つの楽器のリズムがつくられた。



枠内が鈴のリズムを表している磁石（写真は2小節のみ）。
上からカスタネット（赤）、鈴（黄）、シンバル（水）、トライアングル（桃）である。

写真3

♩ = 80

カスタネット

タンブリン

すず

トライアングル

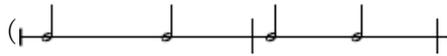
シンバル

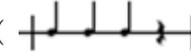
譜例1 11月25日

○B児とC児のリズムづくり

その後、11月27日にB児とC児がタンブリンのリズムづくりを行った。A児のように耳から得た音楽に合わせてリズムをつくる方法に比べ、B児は先にリズムをつくってみてから再現して鳴らすという方法をとっていた。

この日の午前中、C児が楽器コーナーでシンバルを手にとって何気なく音を鳴らしていた。尾辻はC児に「C児と一緒に発表するんだよね」と話しかけ、一緒に楽器遊びをしようと試みた。そこへB児が楽器コーナーへ来たため、尾辻は「B児はなんの楽器だっけ」と話しかけた。楽器の担当表を見ながら「B児はタンブリン？」と確認するとB児は頷いた。尾辻が「一緒にやろうよ」と誘うとB児はタンブリンを手を取った。それを見て、シンバルを持っていたC児もタンブリンに持ち替え、B児とC児のリズムづくりが始まった。尾辻はボードを指さしながら「タンブリンは、決まってるんだ、まだ」と示すとB児はまたタンブリンを持ったまま頷いた。B児はタンブリン用の緑色の磁石を手に取り、ボードに貼ろうとした。尾辻は「まだ貼らなくても大丈夫。音楽に合わせて叩いたら、その通りに貼るよ」と声をかけたが、B児はそのまま磁石を貼り始めた。

二拍ごとに示してある縦線の上に規則正しく貼っていき、おそらく最後まで貼ろうとしていた。8小節間貼ったところでC児が流したカセットの音楽が流れ始めたため、B児は磁石を貼るのを一旦やめて二人で音楽に合わせてタンブリンを叩き始めた。B児とC児は二人で、9小節目からもそのまま同じリズムで叩き続けていたが、最後まで同じリズム（)で演奏したB児に対し、C児は12小節目だけこれまでと違うリズムで、歌詞の「チャチャチャ」に合

わせて () のリズムで叩いた。尾辻が「それいいね」というと、B児も賛同したように笑みを浮かべ、磁石を手に取りボードに表示した。友達の表現に触れ、認める様子は、まさに音楽によるコミュニケーションが行われていたといえよう。

Ⅱ期

○一部の子どもによる合奏試演

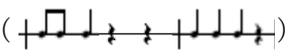
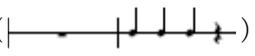
12月5日、お菓子パーティーで合奏を披露するメンバーが保育室の楽器コーナー前で集まった。11月25日からの8日間で自由遊びの時間に楽器遊びをした子ども達で、合奏を行った。カスタネット4名、鈴2名、タンブリン3名、トライアングル1名、シンバル1名の合計11名であった。あとの11名は、合奏をするのを聴いた。この活動のねらいは、子どもにメンバーと一緒に演奏するという経験と実感を持てるようにすること、そして、まだ楽器遊びをしていない子どもへの刺激となり、当日に向けての意欲が高まるようにすることである。

合奏をする子ども達は当然まだおぼつかず、不安げな表情を浮かべている子どももいたが、音楽に合わせてボードの自分のパートを目で追いながら懸命に楽器を鳴らしていた。合奏を終えた後、聴いていた子どもに感想を聞くと「上手だった」と友達の様子に刺激を受けた感想や、「トライアングルが綺麗な音だった」と楽器の音色を味わった感想があった。

合奏をした子どもからは、「ちょっと難しいところがあった」との感想があった。尾辻が「どのあたりが難しかったか覚えてる？」と聞くと、前奏では音を鳴らさずに待っているところだと答えた。確かにボードは歌が始まる場所からの表示であり、前奏を含めた音楽の始まりと一致していないことも原因だと考えられる。今後の教材研究の課題ともなる子どもの「困り」を聞くことができた。

最後にお菓子パーティーまでの保育日が残り10日であることを確認して集まりを終えた。その後D児とE児はすぐに楽器を手に取り、カセットに合わせて合奏を始めた。カセットから音楽が流れ始めると、気付いたA児も加わり、3人でボードを見ながら合奏をした。尾辻が「やりにくいところとか無かった？」とたずねると、D児が「ある」と答えた。更に聞くと、5小節目を指さしたため、尾辻は「空にきらきらおほしさまー」と歌いながら、2小節目間手本を鳴らして見せた。するとD児は冒頭から歌いE児と共に演奏を始めた。先ほどの手本で理解したのか、歌いながらボードにある通りに2分音符分の長さ、鈴を鳴らして演奏していた。6小節目まで演奏したところでA児が話しかけてきたため演奏は一度中断したが、D児が「いくよー」と声をかけ、初めからカセットに合わせて演奏した。この3人はおよそ20分間楽器遊びをしていた。

○リズムの変更に気付くA児

12月9日、数名の子どもが合奏を始めた。その中にいたA児（カスタネット担当）は、一度合奏を終えるとすぐに「待って待って、ここなんか無くなってるのに気づいた」と尾辻に訴えた。3・4小節目はこれまで () のリズムだったのが、F児の意見で () と変更されていたのだ。尾辻は「ここ（4小節目）はお休みにして、『チャチャチャ』（5小節目）に気持ちを込めて鳴らしたらいいんじゃないかなってお話ししてたんだけど」と、F児の意見をA児に伝えた。「試しにこれでやってみようよ」と提案したが、ボードの磁石の位置をこれまで馴染んでいたリズムに直すと一度その場を離れてしまった。しばらくしてF児が楽器コーナーに来て、近

くにいた友達と合奏を始めた。尾辻は「ここ（4小節目）どう？お休みの方がやりやすいかな？」と問いかけたが、F児は「大丈夫」と答えてA児のつくったリズムで楽器遊びを続けた。

Ⅲ期

○発表メンバー全員での試演

12月10日、メンバー全員（1名欠席）で合奏を行った。前奏と間奏は休むことを統一した。それぞれ懸命にボードを追いながら楽器を鳴らす姿は12月5日の様子と同じだが、笑顔を浮かべながら楽しそうに演奏する子どもが増えた。

一度カセットに合わせて合奏し終わると、G児（鈴担当）が「最後なんかしたい」と提案した。尾辻は「例えばどんな感じ？」と問いかけた後、最後の3小節間を歌った。すると、後奏が終わるタイミングに合わせて鈴を鳴らした。以前自由遊びの時にE児（鈴担当）が同じ趣旨のことを言っていたのを思い出し、「なるほど。E児も同じこと言ってたよね。鈴の人みんなでやってみる？」と提案し、試しに鈴の4人で合わせて鳴らしてみた。この一斉活動では時間が迫っていたため全員でするか等の話し合いまではできずにここで終わってしまったが、G児の提案に刺激を受けたことは確かである。後の自由遊びの時間に、他のパートも全員で最後の音を鳴らしたいとの声があり、全てのパートがそのように整っていった（写真4、枠線内）。最後にお菓子パーティーまであと7日であること、本番はボードを見ずに演奏することを伝えて活動を終えた。

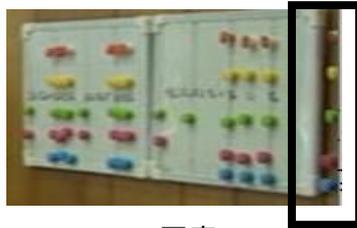


写真4

○H児とI児、J児によるリズムづくり

シンバルはまだリズム打ちが決まっていない箇所（5～10小節）があったため、尾辻が誘ってシンバル担当のH児、I児と共にリズムづくりを行った。音楽に合わせて自由に叩かせてみると、全て8分音符で小刻みに鳴らした。尾辻は「他の楽器の音が聞こえなくなっちゃうかも」と心配して見せた。尾辻は8分音符のリズムを再現して叩いてみせ、すぐ後ろでJ児がトライアングルを持って鳴らしていたため、H児に「トライアングルの音聞こえた？」と問いかけた。H児は首を横に振りながら「いやぁ～聞こえない」と答えた。尾辻が「聞こえないでしょう。じゃあどういう風にしたらいかな」と問いかけると、I児はシンバルを弱い力で、先ほどよりも遅いテンポで叩き始めた。拍を長くするというよりは、小さい音で叩くために右手と左手をゆっくり近づけたために自ずと音を鳴らす間隔が空いたのかもしれないが、尾辻はそこで「ゆっくり鳴らしてみるってこと？」と問いかけた。I児は頷き、尾辻の歌に合わせて「ゆっくり」を意識して2小節間鳴らしてみることにした。先ほどまでトライアングルをしていたJ児もシンバルを手に取り一緒に叩いた。J児が二分音符で叩くのを聞きながら、H児とI児も合わせて叩いているようだった。尾辻がボードにシンバルの水色の磁石を整え、シンバルのリズムが決まっていた（譜例2）。



譜例 2 5～10 小節

こうして完成したリズム打ちを以下に示す（譜例 3）。

譜例 3

IV 期

○聴きあう活動、本番前の練習、本番

12月16日は、カスタネット・タンブリン・鈴と、トライアングル・シンバルの2つに分けて聴き合う活動を行った。客観的に友達の様子を見たり音を聴いたりして、音を合わせるイメージや本番の様子をイメージしてほしいと考えたためである。

この時タンブリン担当のK児は、数日前に園内で行われた誕生会の行事で《おもちゃのチャチャチャ》の合奏を披露していたのだが、ここでタンブリンとは違う楽器をそれまでとは違うリズムで演奏したため混乱したと訴え、タンブリンのリズムの変更を希望した。そこでタンブリンのメンバーで話し合いを行った。6小節目から10小節目をK児が安心してできるというリズム打ちに変更して、本番を迎えることとなった（譜例4、譜例5）。

譜例 5 変更したリズム

当日は、前奏・間奏の部分に多少ばらつきがあったが、おおむね自分の役割を全うしていたので

はないかと思われる。終わった直後に I 児は「ちょっと間違っちゃった」と自分の演奏を振り返りつつ、表情は晴れやかで安堵しているように感じた。子ども達なりに緊張感を持って臨み、達成感を味わっていたことが見て取れた。

5. 考察

本研究では、子どもの主体性や創造性を発揮した合奏づくりを行うために、環境構成や援助を考え、実践を試行した。

1 点目に、環境構成の効果について考察する。保育室内の物的環境について、子どもが楽器を触りたい、表現したい、と思った時にいつでも楽器に触れて遊べ、合奏づくりが行える場を設定した。子どもが自らその環境に関わっていくということは、楽器や合奏に興味関心を持ったからと解釈でき、子どもの合奏に向かう姿勢が一定程度高まっていることを示唆していると捉えることができる。

2 点目に、教師の関わり方について考察する。子どもの感性を大切に、まずは自由に音を楽しむ姿勢を認めるようにした。合奏づくりにおいて教師が設定した場と時間に子どもを引き込み「教える」のではなく、あくまでも子どもが思いついたことやしたいこと、子どもの中から表出されたことを実現するための手助けをするという姿勢で関わり、「援助」に徹した。合奏づくりをしている子どもの様子からは、楽器のもつ音色や音量などの特徴を感じながらリズムづくりをしていることが見取れた。例えばトライアングルのリズムについて、8分音符で鳴らし続けていた友達に「うるさい」と言う場面があった。否定的な言葉ではあるが、トライアングルの音量の大きさと、音が伸び続ける特徴（音色）に気付いた場面と言える。それに気づいたことを証明するように、最終的な楽譜では、「チャチャチャ」の歌詞に合わせて揃えて鳴らす部分以外は全音符に整えられた。教師が与えたリズムではなく、子ども達が試行錯誤しながら、楽器の良さを生かしたリズムを完成させている場面が現れたことは、本実践の大きな成果と言える。

3 点目に、合奏に取り組む時間の持ち方について考察する。自由遊びの時間に取り組めるようにしたため、安心して自分の納得が行くまで何度も試したり繰り返したりする姿が多数見られた。誰かに左右されることなく、じっくりと取り組める時間を保証することが、感性を働かせて創造する上で大切であるということの証左である。

一方、本実践における課題としては次の2点が挙げられる。

1 点目は、友達の考えを直接聞き、話し合っ合奏づくりをする機会が必ずしも保証されなかったということである。それは、やりたい子どもがやりたいタイミングで楽器遊びや合奏づくりを行ったことに起因する。「子どもの実態」の項で触れた、リズムの変更に気付く A 児の事例を見ると、F 児が変更をする時点もしくは A 児が変更気付いた時点で、A 児と F 児、さらには同じ楽器のメンバー全員で、リズムを変更するかどうか決めたい場面であったと言える。しかし自由遊びで個別にリズムづくりを行っていたため、すぐにそれが叶わなかった。今回は尾辻が媒介となり、一つの合奏をつくり上げることができたが、本来なら子どもが直接互いの思いや考えを聞き合い、一緒に試すなどしながら決めるのがより理想的である。一人一人が自由に、じっくりと音を感じて、音と向き合うからこそ育める力がある一方で、合奏の特徴でもある「友達と協働する」という活動も子

どもの育ちにとって重要なことである。両者のバランスがとれた指導法を工夫する必要があると考えられる。

また2点目として、楽曲と使用楽器の選択をどのように行うかということが挙げられる。先述したように、今回は時間の都合上教師が提案したが、子どもが考え、設定することで合奏づくりへの意欲がより高まる効果も期待できると考えている。

おわりに

本稿では、子どもが主体となって合奏づくりを行い、自由遊びの中で合奏をつくりあげていくという試みを行った。表現領域で幼児期に育みたいことは、幼児自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わうことや、豊かな感性や表現する力を養うことである。

合奏づくりなど発表に向けた取り組みを、自由遊びの中で柔軟に行うことで、子どもは「やらされる」のではなく興味を刺激されて主体的に取り組むことができ、子どもの表現の意欲が高まったり、感性を働かせる姿を見ることができた。それは、「子どもの感性を大切にしながら表現する」というねらいの達成につながっていくことへの示唆と捉えられる。今後も、自由遊びで子どもが伸び伸びと自由に感性を働かせながら、じっくりと音楽に触れられる活動を大切にしつつ、一斉活動の利点も加味しながら、よりよい指導法の追究に努めたい。

註

- 1) 西洋音楽では、1パート1名の場合は〈合奏〉と呼ばずに〈室内楽〉というが、ここではその区別なく本文中の意味で〈合奏〉と呼ぶ。
- 2) 自由遊びの時間は午前中に約1.5時間、午後に約1時間である。

謝辞

本実践にご協力くださいました鹿児島大学附属幼稚園の園長、副園長、学級担任の先生、職員の皆様、子ども達に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 横井志保（2010）幼児の叩く活動に関する研究—表現を引き出す活動の流れと方法—。名古屋柳城短期大学研究紀要、第32号、pp.141-146
- 堀内久美雄編（2009）新訂 標準音楽辞典 アーテ 第二版。（株）音楽之友社、pp.411-412
- 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説。（株）フレーベル館、pp.28-29、p.240
- ベネッセ教育総合研究所（2019）第3回幼児教育・保育についての基本調査
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5444>（参照日2020.07.19）